



池大雅《十便図》より〈釣便〉 明和8年(1771) 川端康成記念会蔵 国宝

Topics

大和し美し 川端康成と安田靉彦

IMAGE×IMAGE / 『日本風景版画』全作品

美術館ボランティアによるワークショップを振り返る

## 川端康成と安田鞞彦が愛した日本の美

新年度を迎えて最初に千葉市美術館が開催する特別展は、「大和し美し 川端康成と安田鞞彦」です。文豪川端康成と日本画の巨匠安田鞞彦が、日本の美術を通して親しい交流を結んだ跡を振り返ろうとする試みです。

川端は池大雅と与謝蕪村の合作で国宝に指定されている「十便十宜帖」を愛蔵していたことで知られますが、ほかにも浦上玉堂の国宝「凍雲節雪図」や富岡鉄斎の「蝦夷人図屏風」など、良き文人画(南画)を心の友としていたことはよく知られています。とくに大雅の自由でみずみずしい感性を評価して、西行の歌意に通ずる「芳野山図」のような和様の濃い作品を愛でていましたし、独自の道を画併の二つ道に切り拓いて見せた蕪村を慕い、蕪村自身が作成の文台を座右に置いて親しんでいたことも最近判明したところです。

一方の安田は、俵屋宗達の水墨画を熱愛していました。それも春の土の香りをかいている子犬や、畑に生える枝豆など、身近に親しい題材をやわらかな墨の広がりを活かして描いた、おだやかでほのぼのとした墨絵をこよなく愛していました。私の恩師である亡き山根有三先生は宗達研究を高いレベルで達成した研究者でしたが、宗達自身の作品と門人の作品とを厳密に区別しようとして、妥協のない鑑識の厳しさで知られていました。そのような美術史家山根に対して安田は、「貴男のように厳しい眼で判別すると、凡作はすべて弟子の筆になってしまう」と不満を漏らしていたといえます。鞞彦遺愛の宗達画「狗子図」と「枝豆図」は、表現の質は決して強くも逞しくもありませんが、心なごむ美の領域を獲得した和風的水墨画として、とりわけ優しく、懐かしく胸に迫ってきます。師に逆らうようで少々困るのですが、ここは私も安田の眼の力の方に軍配をあげたいと思います。

鎌倉に住んでいた川端は、近くの大磯にある安田邸を訪れ、美術談義で深く心を通わせ、楽しみあったといえます。その二人が共通して敬愛したのが、江戸時代後期の禅僧で歌人、詩人でもあった良寛の書でした。安田は良寛のひととなり素直に通った書風に憧れ、自らの書もそれに倣ってさらに洗練を加えたものでした。

安田の良寛をたたえる言葉には、貴く、美しいものがあります。

良寛の芸術は暖かい春の光にもろもろの生物が生れ出づるやうな気持ちです。幽かな細い自然の囁きを聞くやうであります。細く小さくとも純淨なひびきであります。

ここに出てくる「純淨」という言葉は、良寛のために安田が特別に造語したのでありまじょうが、まことにふさわしく、似つかわしく思われます。

川端はまた、ノーベル賞受賞の記念講演で、良寛の辞世の和歌を引き、日本人の心性を代表させています。その歌「形見とて何残すらむ春は花 夏ほととぎす秋はもみぢ葉」では冬の景物に触れてい

ません。良寛は天保2年(1831)1月6日、雪深い越後の地に亡くなっているからです。川端は「この詩僧の『末期の眼』には、辞世にある、雪国の自然がなほ美しく映ったであらうと思ひます」と推測しています。

良寛の書に、右から左に「自然」と2文字が記された、印象深い掛幅作品があります。この言葉を「しぜん」と読めば「山川草木など人の力を超えた物」ということになり、「じねん」と読めば「おのずからそうであること、天然のままであること」という意味になります。私は後者の「じねん」と解釈して、良寛のおのずからなる清らかな生き方に重ね合わせたいように思われます。川端康成、安田鞞彦というこよなく深い美の理解者は、日本にかつて在った「じねん」の美や、「じねん」の芸術家たちを、心からいつくしみ、貴んだのでした。

以上のことを、「大和し美し」のカタログを見ながらしみじみと思いを凝らしたものでした。どのような会場の展示になるか、やがて来るオープニングの日まで、仕上がりのほどを楽しみに想像しているところです。

〔館長 小林忠〕



俵屋宗達《狗子図》江戸時代 個人蔵

# 大和やまとし 川端康成と安田靉彦 美うるはし

昭和23年、作家・川端康成(1899-1972)が初めての全集を新潮社から発刊するに際し、日本画家の安田靉彦(1884-1978)に表紙画の制作を依頼したことをきっかけに、二人の交流が始まりました。時に安田靉彦は64歳、すでに画壇の大御所で、古美術のコレクションや研究でも知られており、一方の川端康成は49歳で国民的作家になりつつある時でした。またそれは、古くから愛好家の垂涎的であった池大雅と与謝蕪村の《十便十宜帖》が多くの手を経てついに川端のもとに収まった、すぐのちのことでもありました。

「全集の装画と題字とを安田靉彦先生にだけたのは実に望外のしあはせである。殊に表紙の絵を各冊別にお描き願ふといふような僭奢は全くわたしの夢想も及ばぬことであった」(『独影自命』)

担当の編集者の「今日の常識で考へられない」「蛮勇のお蔭」で、毎巻別の絵を描いてもらえることになったとか…。制作は昭和23年1月より28年2月までにわたり完結、掌中の玉のごときこの素晴らしい可憐な装画全16図は、のちに川端の依頼により渋い金襴緞子の表紙で金梨地の台紙の折帖に綿密に仕立てられ、二重箱に納められて現在も大切に川端康成記念会のもとに保管されています。「後の語り草にもなるだらう」と川端があとがきに予言しましたが、この装画帖は、昭和40年に開催された安田靉彦の米寿記念の回顧展の折には川端家より借り受け出陳され、また靉彦最晩年の昭和51年には複製『川端康成全集装画帖』も刊行されるなど、安田靉彦にとっても記念的な仕事の一つとなりました。

共に古美術に深い関心と審美眼とそして“コレクター魂”を持った作家と画家が、美術品を通じてどのように交流したのか、今に名だたるこの二人のコレクションを紹介し、共に憧れ、求めたよきもの、美しきものとは何かを探る、これが本展のテーマです。出品作品は、約30にのぼる多数の借用先の機関、個人の方々のご協力を得て、川端康成コレクション約100点、安田靉彦旧蔵の美術品が約40点、安田靉彦の絵画約40点、良寛遺墨が約20点、二人の往復書簡など関連資料が約30点、そのほかに図録(本展にあわせて昨年9月に求龍堂より刊行された同名の書籍『大和し美し 川端康成と安田靉彦』)には掲載されていない新発見や追加の出品を特別出品として約20点という、合計約250点の多数となりました。7・8階の全展示室を使って一堂に展覧いたします。

会場の構成は、実はまだ現在もレイアウトの作成に苦闘中ながら、図録とは異なる流れとなる予定であり、追加の出品もありますので、本稿ではその会場に沿うようにご紹介し、皆様へのお誘いとなればと思います。

## 「第1章 文豪・川端康成の世界」

川端康成が日本人初のノーベル文学賞を受賞したのは昭和43年のこと。当時世間に与えた衝撃の強さは今日の比ではなく、文学の分野において日本人に世界的な賞が与えられたという驚きは大きな喜びと自信につながったと言われます。昨年も大きな話題となったノーベル賞なのでご関心の方もあるでしょうが、その賞状は受賞者にちなんだデザインになるとのことで、川端の場合は鮮やかな千羽



安田靉彦《飛鳥の春の額田王》昭和39年(1964)  
滋賀県立近代美術館蔵(4/28~5/10展示)



『川端康成全集』第1~8巻



鶴の図柄が選ばれました。ここでは受賞前後の関連資料を導入として、「川端文学 装丁・挿絵の美」「文豪の座右宝」「交流の画家たち」と題するコーナーにより、文豪の身边に愛し置かれたさまざまな美のかたちを紹介しつづけます。何でも使ってみる方だと自ら語る川端が、名器も惜しげなく用いそして凝視もしたであろうさまや、幅広い好奇心により同時代の多くの芸術家から多大なる刺激を受けてきたこと、そしてその強い“コレクター魂”も浮き彫りになることでしょう。

### 「第2章 日本画家・安田鞞彦」

若くして画壇にその名をとどろかせた早熟の画家安田鞞彦。大正時代に開花した才能は、昭和前期には、誰もが今日「清澄高雅」と繰り返し賞賛してやまない様式美を完成させ、80年の長きにわたって清新な特に歴史画の分野を切り拓きつづけたのでした。弱冠15歳にして主題に新しい解釈を盛り込もうとする意欲が見られる現存最古作品《遣唐使》にはじまり、画面上のさまざまな仕掛けが考え抜かれた成果とみえる初期の優作《花の酔》(図1)、ミレーの《落ち穂拾い》に触発されたというエピソードを伝え聞く珍しい《神農》、中国の《女史箴図巻》の学習成果が特に指摘され、紙の持つ可能性にも目を開かれる《日食》など、意欲作、実験作が並びます。

こうした鞞彦の作品の根底には、若くして受けた古美術への感銘がありました。以後も終生かわらずその関心は深く、広いものがあり、古美術の鑑賞、観察は「制作の養いになる」と、一門の画家たちにも持つことも含めて勧めました。ここでは特に戦後数体入手してとても大切にしていたという安田鞞彦遺愛の「俑」(中国の古墳の副葬品の一つで、人の形をした像のこと)をご覧ください、これに題材を得て描かれたものの中でも、これまであまり知られていなかった《唐俑》(図2)も初めてご出品いただくことができましたので、あわせて紹介します。

また、院展出品作などのような代表的作品とは別に、知人に宛てて描かれたような小品などにみる、簡潔にして研ぎ澄まされた感覚は、他の追随を許さない鞞彦画の気高い境地といえましょう。そうした逸品が本展に揃うのは、秀逸な個人コレクションのおかげであり、その存在が本展の趣旨を導き昇華させる力となったとさえいえるかもしれません。“会場芸術”ではないだけに、一堂に会して見ることがかえって難しいかもしれないこのような作品群との出会いは、本展のまたひとつの見所でもあります。

### 「第3章 美との邂逅 川端康成と安田鞞彦」

二人の往復書簡は約30通確認されましたが、その多くが美術に関する内容でした。川端康成は優品を入手すると大磯の安田家まで運び、ともに至福の時間を過ごしました。昭和25年に撮影された林忠彦による写真(図3)が何よりも雄弁に二人の関係を語っているようです。これは川端全集の関係で新潮社の仕事で行われたようですが、林忠彦の次のような言葉が残ります。「…二人のからみとなると、これは大変なもので、本当に静かな会話がもれるだけで、シーンとした雰囲気、こういう世界がこの世の中にあるのかと思った」と。



安田鞞彦《花の酔》宮城県美術館蔵 (図1)



安田鞞彦《唐俑》愛知県立芸術大学蔵 昭和22年頃 (図2)



《平治物語絵巻残欠 六波羅合戦巻》(部分) 鎌倉時代



浦上玉堂《東雲節雪図》江戸時代 川端康成記念会蔵 国宝 (図4)



安田鞞彦《布袋》(部分) 昭和5年頃



川端康成と安田鞞彦 大磯の安田邸にて 1950年6月22日 撮影/林忠彦 (図3)

安田の元へ川端が作品をしばらく預けてゆっくり見てもらうということもあったようです。そうした二人の交流を示す書簡などと共に、川端康成旧蔵として有名な国宝の《東雲篩雪図》(図4)、《十便十宜図》(表紙)、安田鞞彦が愛してやまなかった宗達の水墨画の逸品もこちらでじっくりと鑑賞下さい。

#### 「第4章 良寛敬慕」

安田鞞彦は大正元年に初めて良寛の書を知り、急速に傾倒を深めていきました。遺墨を求め、臨模し、論考を執筆し、書籍を監修して装幀も自ら手がけるなど、良寛を世に出した第一の研究者でした。愛蔵品も一時は約80点にのぼったと推測されています。その中には遺墨のみならず良寛唯一の《自画像》(図5)も、国上本覚院旧蔵と伝えられる《良寛乾漆像》も、在世時のしかも弟子によるものとして貴重な肖像画賛もあり、それらから苦勞して導かれた鞞彦による良寛和尚の肖像画は、良寛イメージの形成に決定的な役割を果たしているといっただいでしょう。川端康成もノーベル賞受賞講演で良寛辞世の歌を取り上げてその心を世界に発信しました。二人の抱いた良寛敬慕の念を、安田旧蔵品と新潟出雲崎の良寛記念館からの特別協力による出品作品によって、追隨していただければと思います。良寛が詠んだ長歌に触発されて制作した鞞彦の珍しい白描画卷《月の兎》や、良寛風の清澄な書もここであわせてご覧いただこうと思います。

#### 「第5章 二大コレクションとの対峙」

安田コレクションの琳派、川端コレクションの文人画など、それぞれに特徴的な内容に加え、両者に共通のもの対比も試みます。例えば埴輪や密教法具など。かつて著名人の愛したやきもの、という趣旨の展覧会で同じ会場に並んだこともあったとや茶碗も今回の特別出品の一例です。ここでは、新たに鎌倉の川端邸で存在が確認され2月初めに新聞各紙で大きく報道された与謝蕪村の《二見文台》(図6)にもご注目下さい。文台とは俳諧の句会などで用いられる小机で、俳人が宗匠となることを「立机」というように大切で象徴的な存在でした。これは蕪村67歳の年に作らせた文台で、裏には蕪村が「渋柿」という銘をつけるなど由来を墨痕鮮やかに認めており、これを譲った弟子への手紙も付属していて興味深い事情を伝えています。桐の白木の色のままの大変きれいな状態であったのが印象的です。川端康成が昭和26年に鎌倉の古美術商から購入したこともわかりました。その後土門拳によってこの文台に眺め入る川端の姿が撮影されましたが、その写真への注目が今回の発見の契機となったのです。

#### 「第6章 大和し美し」

ここで再び、安田鞞彦の珠玉の作品世界へ誘います。二人が追求したいにしえの美に触れたあとこれらの作品がどのように映るのだろうか、そんな関心から、敢えて最後の小さな展示室に分けてみることにしました。

「大和は国のまほろば たたなづく青かき 山ごもれる大和し美し」  
川端康成が自裁の直前に、歌碑のため万葉集から選んだ倭建命の絶唱歌です。そこから採った本展のタイトルが、終わりにあたって響いてくることを祈るような気持ちです。

以上のように、極めて多岐にわたる作品群の展示、いくつもの世界が交錯する会場構成は、当館としても久しぶりのことです。ノーベル賞のメダルというものを一目見てみるのもよし、文豪の書斎から多数のアイテムを丸ごとお借りした再現コーナーをのぞくのも一興です。本稿を記しているまさに数日前にも新発見となって出陳が決まった珍しい作品もあり、そうした未知の作品への関心の向きもあるでしょう。二大コレクションのこの1点を選ぶのはまた至難の楽しみでもあります。二人の交流ということできまざまに設けられた入口から、かつて確かに存在した美をもとめる心の世界へ導き入れられることを念願するものです。

[学芸員 松尾知子]



良寛《自画像》江戸時代(図5)



与謝蕪村《二見文台》天明2年(1782)川端康成記念会蔵(図6)

### 大和し美し 川端康成と安田鞞彦

2009年4月4日(土)▷2009年5月10日(日)  
10:00—18:00(金・土曜日は20:00まで)  
\*入場受付は閉館の30分前まで  
[休館日] 4月6日(月)、4月27日(月)  
[観覧料] 一般 1,000(800)円  
高校・大学生 700(560)円  
小・中学生 無料

\* ( )内は前売、団体30人以上および市内在住60歳以上の料金

\*前売券は、千葉都市モノレール「千葉駅」「千葉みなと駅」「都賀駅」「千城台駅」の窓口(5月10日まで)にて販売

## 「IMAGE × INAGE」と『日本風景版画』全作品—美術館企画による千葉市民ギャラリー・いなげの展覧会

「IMAGE × INAGE」(2009年1月14日-25日)

2008年度より、千葉市民ギャラリー・いなげを会場に、現代アートの展覧会を毎年この時期に開催することとなりました。この展覧会は、千葉大学との共催により、同大学の授業「展示をつくるb」のなかで、学生、講師、千葉市美術館が協力しあって企画するものです。記念すべき第1回展は、会場となった稲毛の風景をテーマに、浅野耕平、ASUNA、斎藤美奈子、m/s(佐藤実)、鈴木泰郎、中居伊織、吉田重信という7人の現代作家の新作を中心に構成。会場入口には、千葉市美術館が所蔵する無縁寺心澄の稲毛を描いた水彩画も出品しました。パソコンで音や映像をコントロールするタイプの作品が多く見られ、新しいイベントの出発を飾るにふさわしい斬新な内容となりました。

例えば斎藤美奈子の作品は、ギャラリー別館の和室にテレビモニターを3台設置して、稲毛の人工海浜の風景と音を流すというビデオアートです。この別館は日本のワインの父神谷伝兵衛の別荘だった建物で、かつては眼前に美しい浜辺が広がっていました。斎藤の作品は、埋立てにより今は失われてしまった海と波の音を蘇らせようというユニークな試みです。またギャラリー近くの千葉市ゆかりの家・いなげでは、吉田重信が虹の作品を展示しました。これは庭に置かれた鏡を使って、古い日本住宅の室内に虹状に光を反射させる光のアートです。古い建物と最新の現代アートとの意外な組合せにより、静謐でありながらインパクトのある空間が作り出されました。



『日本風景版画』全作品』展示風景



斎藤美奈子の作品



吉田重信の作品

『日本風景版画』全作品」(2009年2月10日-22日)

千葉市民ギャラリー・いなげでは、毎年2月に千葉市美術館の所蔵作品による展覧会を開催していますが、2008年度は『日本風景版画』全作品』を行いました。『日本風景版画』は、中島重太郎の主宰する日本風景版画会より、1917年から1920年まで計10集刊行された版画集で、石井柏亭、森田恒友、平福百穂、坂本繁二郎、小杉未醒、石井鶴三が作品を寄せています。各集5枚の版画と木版タイトルの付されたタトウも含め、その全点を公開しました。また、あわせて近年人気の版画家川瀬巴水の『旅みやげ』第1集および2集を展示し、好評を得ました。

### ◎市民美術講座のお知らせ

「市民美術講座」は、市民のみなさまに千葉市美術館のコレクションを紹介し、作品についての理解を深めていただくものとして、2004年度より実施しております。

当館スタッフが毎回1つのテーマを選び、わかりやすく解説します。参加は無料です。

[時 間] 14:00より(開場は30分前)

[場 所] 11階講堂

[定 員] 先着150人(入場無料)

○第1回 4月25日(土)

「川端康成と安田靫彦 二人の陶磁コレクション」

[講師] 藁科英也(当館学芸係長)

○第2回 5月2日(土)

「画家と美術コレクション」

[講師] 松尾知子(当館学芸員)



## 美術館ボランティアによるワークショップを振り返る

約30人のメンバーからなる美術館ボランティアの会では、2008年度も年間を通して様々な活動に取り組みました。好評をいただいているワークショップについては、館内のイベントだけでなく、出前のお誘いをいただくこともありました。

展覧会に関連した内容の立ち寄り式ワークショップは、企画趣旨を十分検討した上、入念な準備とチームワークが成功のカギとなります。有志による「摺りの会」(仮称)では、恒例の摺り体験の他、講師を招いての年賀状づくりも企画しました。当館の近世・近代の版画コレクションを身近に感じ、多くの方に親しんでいただきたいとの思いを持ち、彫りの作業や木版以外の版について学ぶなど、興味の対象やできることを広げつつあります。

### ○2008年度に行われた、ボランティアの会企画・運営によるワークショップ

7月12日(土)	「インドネシアの香りを楽しむ」
7月13日(日)	「自分のしるし 蔵書票づくり」 (子どもチャレンジ教室/主催：千葉市生涯学習センター)
10月12日(土)	「八犬士キーホルダーをつくろう」
11月9日(日)、16日(日)	「木版画年賀状を作ろう」
12月14日(日)	「多色摺木版画体験 クリスマスカードをつくる」 (まなびフェスタ/主催：千葉市生涯学習センター)
1月24日(土)、25日(日)	「写楽、夢二を摺ろう！多色摺木版画ワークショップ」



「八犬士キーホルダーをつくろう」制作風景



「写楽、夢二を摺ろう！」会場の様子

## ボランティア日和 episode19

早いもので千葉市美術館のボランティアをさせてもらうようになって、この4月で丸3年が経ちました。美術館ボランティアのことを周りの人に話すと、「それって実際にどんなことをしてるの?」とよく聞かれます。

美術館ボランティアの活動については、美術館ニュース47号で担当学芸員さんから詳しく紹介がありましたとおり、企画展において展示作品の解説を行うギャラリートーク、千葉市内の各地から来館する児童・生徒の団体鑑賞をサポートする鑑賞リーダー、そして、展示作品理解のための体験型イベントのお手伝いなど、ボランティアそれぞれの特性に合わせて多岐に渡る活動をさせていただいております。

特に体験型イベントを中心に、近年ではボランティア自身の手で企画立案し、運営をさせていただくことも増えてきました。昨年だけでも、「八犬伝展にちなんだキーホルダーをつくるワークショップ」「蔵書票や所蔵作品をモチーフにした版画を摺る会」他、「中学生のためのギャラリークルーズ」など、いくつもの企画を実現させることができました。これは、決して当たり前のことではなく、各自の個性を尊重し信頼して委ねていただけるこの美術館ならではの寛容さのおかげであり、温かく見守ってくださるお客様あってのことです。それぞれの活動のさまざまな場面で、幅広い年代の来館者の方々とふれあい、一緒に作品を鑑賞し、ワークショップで体験の喜

びを共有させていただくことができ、ほんとうにありがたいことだと感謝しています。

ボランティアとしてみなさまや美術館にお返しできることは、もっと美術館を楽しんでいただけるよう、美術館についてさらに知っていただくこと、気軽に訪れていただけるような活動を進めていくことだと考えています。そのために、これからはより美術館に来館しやすくなるような工夫をしたり、美術館以外の場所にも積極的に飛び出して行き、地域の方々や学生さんたちとも連携しながら街全体の活性化にもつながるように、さらに活動の内容や範囲を広げていけると、新年度を迎えるにあたって希望に胸をふくらませています。

[美術館ボランティア 工藤泰代]



蔵書票づくりのワークショップの様子

## ◎千葉市美術館、長期休館のお知らせ

2009年9月初旬から2010年2月中旬まで、千葉市美術館は空調設備工事のため休館いたします。なお展覧会は8月9日を最後にお休みとなります。長期の休館によりご迷惑をおかけしますが、何卒ご理解を賜りますようお願い申し上げます。

## 今後の展覧会スケジュール

4月4日(土)―5月10日(日)	大和し美し 川端康成と安田靉彦
5月16日(土)―6月21日(日)	パウル・クレー 東洋への夢 江戸浮世絵巻
6月27日(土)―8月9日(日)	瀧澤久仁子コレクション 祈りをつづる染と織―タイの美しい布 石井光楓―パリの青春 こんな作品あったよ～中学生が選ぶ所蔵作品展～

## ミュージアムショップ通信

●7階ミュージアムショップから、当館コレクション作品をモチーフにしたグッズをご紹介します。

## ○クリアファイル4種

(各税込315円)

竹久夢二「小春」「治平」  
喜多川歌麿「納涼美人図」  
勝川春草「婦人風俗十二ヶ月 端午」  
葛飾北斎「千絵の海 総州銚子」



A4サイズの書類を保管・持ち運ぶのに便利なクリアファイル。展覧会のチラシなどを入れるのにピッタリです。4種類の中でも、北斎が描いた銚子のファイルは両面に図柄が印刷されていて、紙を差し込むと少し違った印象になる人気の商品です。

## ○アートミラー3種

(各税込900円)

葛飾北斎「富嶽三十六景 凱風快晴」  
歌川広重「東海道五十三次 蒲原」  
喜多川歌麿「納涼美人図」



名刺サイズのステンレスミラーの裏面に、当館所蔵の浮世絵作品をプリントしています。ポケットに入る大きさで使いやすく、当館のロゴ入りケースも付いています。ご来館の記念として、御土産として、また海外の方へのプレゼントとして、喜ばれそうな一品です。

## ○ミニクリアファイル4種

(各税込210円)

小早川清「ダンサー」  
喜多川歌麿『画本虫撰(部分)』  
浜口陽三「17のさくらんぼ」  
長澤蘆雪/曾道怡「花鳥蟲獣図巻」



ちょうどハガキが入る大きさのクリアファイル。レシートや領収証を入れたり、バッグの中に入れておくと使い勝手のよい品です。手頃なお値段ですので、焼き増ししたご旅行の写真をはさんでお友達にプレゼントする方も。蘆雪の可愛い犬や、小早川清のモダンガールなど、千葉市美術館らしいモチーフもご好評をいただいております。

クリアファイル・ミニクリアファイルは、他にも美術作品をモチーフにしたものを豊富に取り揃えております。



## [交通案内]

- JR千葉駅東口より徒歩約15分
- 千葉都市モノレール県庁前方面行「霞川公園駅」下車徒歩5分
- バスのりば7番より大学病院行、または南矢作行にて「中央3丁目」下車徒歩3分
- 京成千葉中央駅東口より徒歩約10分
- 東京方面から車では、京葉道路または東関東自動車道で宮野木ジャンクションから木更津方面へ。貝塚IC下車。国道51号を千葉市街方面へ約3km。広小路交差点近く。
- 地下に駐車場があります。

## [編集・発行]

千葉市美術館  
〒260-8733 千葉市中央区中央3-10-8  
TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316  
Chiba City Museum of Art  
3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733, Japan  
<http://www.ccma-net.jp>  
[発行日] 2009年4月4日  
[印刷] 半七写真印刷工業株式会社

 千葉市美術館  
Chiba City Museum of Art